



田中義皓著

## 世界の小国：ミニ国家の生き残り戦略

講談社 2007



21世紀に入って、二つの国が国際社会への仲間入りを果たした。一つは、アジアの東ティモール民主共和国、もう一つはヨーロッパのモンテネグロ共和国だ。両国の独立によって、世界の国の数は193カ国となった。この両国に共通するのは、人口規模がいずれも100万人にも満たない、いわゆるミニ国家（国連の用語法では micro-state と呼ぶが、本文では愛称として mini-state と呼ぶ）であることだ。

人口1億2000万人の日本から見ると、ミニ国家は作家井上ひさしのベストセラー『吉里吉里人』の世界に登場する「おとぎの国」を連想させる。事実、日本の市町村と較べれば、独立当時、人口79万人の東ティモールは浜松市（80万人、2005年現在）に、人口66万人のモンテネグロは熊本市（66万人、2005年現在）に相当する。実は、こうしたミニ国家が世界の国数の五分の一強の、44カ国も存在していることは、あまり知られていない。さらに注目されるのは、こうした極小国家が1970年代以降加速度的に増えているということだ。ある意味で、現代は古代・中世を彷彿とさせる「ミニ国家ルネッサンス」の時代と言えるかもしれない。

皆さんは、ミニ国家といえば、ヨーロッパのルクセンブルグ、モナコ、リヒテンシュタインなどを思い浮かべるかもしれない。しかし、現在のミニ国家の大半はアジア、オセアニア、カリブ海、アフリカ、中東などにあり、いずれも第二次大戦後に誕生した諸国である。

ところで、このようなミニ国家が果たして政治的、経済的に自立して行けるのか、と疑問をもたれる方も多い。たしかに、発展途上のミニ国家の場合には困難も大きい。だが反面、これらの国々は小国性をハンディとしてよりも、むしろ武器としてしたたかに生きている。例えば、1982年の国際捕鯨委員会による商業捕鯨一時停止決定でキャスティング・ボートを握ったのは、カリブ海のミニ国家の「数の力」であった。また、「極小国家」バチカンはポーランドなど東欧民主化で「神の代理人」を越えた国際政治上の存在である。

さらに経済分野でも、ミニ国家は生き残りをかけて知恵をしぼっている。現在世界に70カ所ほどある「オフショア金融センター」は、その一つであろう。パハマ、モナコなどは「タックス・ヘイブン」（租税回避地）をテコに、先進諸国における増税や金融取引への規制強化を嫌がる欧米諸国からの資金の受け皿となっている。また、パハマ、マルタ、キプロス、ナウル、バヌアツなどのミニ国家は船舶への優遇税制や緩やかな海事法規をもつ「便宜置籍船」国として有名である。

国際社会には、大小さまざまな国々、また文化的にもさまざまな態様の国々がある。グローバリゼーションによって国際社会がともすれば画一化、均質化するなかで、ミニ国家は多様性や文化的豊かさをもたらしめるものとして、なくてはならない。

今回出版された『世界の小国：ミニ国家の生き残り戦略』（講談社選書メチエ）は、これまで国際社会において、いわばブラインド・スポットとされてきたこれら諸国の新たな国際的プレーヤーとしての実像と可能性を探る試みである。

（たなか よしあき 外国語学部教員）



カット 木下 俊貴  
（工学部 4年次生）

榎本恵美子, 山本啓二訳



## カルダーノのコスモス：ルネサンスの占星術師

アンソニー・グラフトン著

勁草書房 2007



ジロラモ・カルダーノは16世紀に北イタリアのパヴィアで生まれ、ミラノを中心に育ち、ローマで亡くなった医者です。しかし、彼は医者だけではなく、少なくとも占星術師、数学者、哲学者、賭博師でもあったとみなされています。つまり、さまざまな分野に秀でた才人だったのです。没後の17世紀にラテン語の著作全集が出版されましたが、それは全10巻、7,000頁にも及ぶものでした。

半世紀前に生まれた同じく多才なルネサンス人、レオナルド・ダ・ヴィンチと最も違っていたのは、長い間カルダーノが「奇人」という評価を与えられてきたことでした。そのためか今まで彼の全体像はなかなか明らかにされてきませんでした。しかし最近になってようやく、研究者たちによって本格的にカルダーノ研究が着手され始めました。具体的には、1989年以降何度かカルダーノに関する国際会議が開催されるようになり、17世紀版の著作に代わる新たな校訂版がようやく作られるようになってきたのです。このような状況で書かれた本書は、特に占星術師としてのカルダーノに焦点を当て、手稿や書き込みのある刊本などの一次資料を駆使して、その人生と仕事に迫った初の研究書として、1999年に出版されました。著者は、プリンストン大学で特にルネサンス期の知的世界を研究しているグラフトン教授です。

カルダーノは自伝を4回も書き直し、自分のホロスコープを4回も解釈し直したことからわかるように、虚栄心のかたまりのような人物でした。そのカルダーノは、自分の人生と生きてきた世界の両方の混沌としたものの中に秩序を見出そうとして、占星術を利用したのです。つまり、占星術という学問的手段を用いて、過去の紆余曲折を描き、将来における障害や回り道を予告することで、さまざまな経験をまとめようとしたのです。

実は、占星術についてどうしても知っておいて欲しいことがあります。古代ギリシア以来19世紀まで行われてきた伝統的な占星術は、今の私たちにとっ

て馴染みのあるものとは、大きく違っている点があるのです。例えば、現在「おひつじ座生まれの人」とか「白羊宮生まれの人」と言えば、誕生時の太陽が白羊宮(おひつじ座)にある人という意味ですが、かつてはそうではなく、誕生時のアセンダント(上昇宮)が白羊宮の人という意味でした。アセンダントとは東の地平線に昇ってくる宮のことです。宮というのは、星座ではなく、黄道上に設定された30度ずつの目盛りのようなものです。今の方式は、惑星などの位置を知るための複雑な暦がなくても、太陽暦の誕生日さえ知っていれば簡単に占星術に親しむことができるように、現代の占星術師が考え出したものなのです。ですからカルダーノの時代にはまったく存在しなかったものです。

ついでにもうひとつ、占星術(星占い)は決して「星座占い」ではありません。ですから「おひつじ座」という言い方は間違っています。「おひつじ宮」とか「白羊宮」のように「宮」というべきなのです。昭和40年代にある占星術師が書いた『西洋占星術』という本が大ベストセラーとなり、残念ながら「おひつじ座」という誤解を招く言い方が定着してしまいました。

(やまもと けいじ 文化学部教員)



カット 今村 唯

(外国語学部 4年次生)

植村和秀著



## 「日本」への問いをめぐっての闘争：京都学派と原理日本社



柏書房 2007

この本は、日本から世界を問いなおそうとして、昭和戦前期の政治に参加し、思想戦に敗北した人たちの考え方を、「翻訳」したものです。

日本語で書かれた思想を「翻訳」というのは奇妙なことです。この本に論じた京都学派の人たち、原理日本社の人たちは、日本的な世界観を主張して独特の言葉を用い、普通の人には意味不明に近い文章を書き連ねています。「絶対矛盾的自己同一」や「絶対無」、「シキシマノミチ」や「コトノハノミチ」といった独特の言葉は、通常の日本語に翻訳しないとわからないのです。

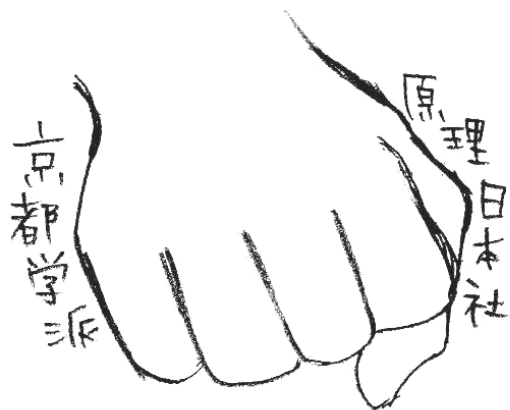
そして本書に翻訳した内容は、彼らが、日本の世界観の主張によって日本文明の世界史的意義を力説し、日本人の世界史的使命を訴え、日本発の新世界秩序を欲した、ということでした。彼らはまさに、日本のナショナリストなのです。ただし、ナショナリストと一口に言っても、実際にはいろいろな立場があります。西田幾多郎を中心とする京都学派の人たちは、日本から世界に創造的に貢献する哲学を提案します。これに対して、蓑田胸喜を先頭とする原理日本社の人びとは、世界は日本に収められたと宣言して日本に歓喜します。西田たちは創造的に生きようとし、日本文明を創造的にして世界に貢献しようとし、ところが蓑田たちは、日本は東洋文明と西洋文明をすでに完成させたとして、一切の個人的創造を否定します。どちらも日本にこだわるがゆえに、蓑田たちは、西田たちを目の敵にするのです。

原理日本社は親鸞信仰の宗教結社であり、自由な言論を否定して、昭和十年代前半に帝大教授糾弾を繰り返した政治結社です。その特徴は、自分たちと異なる意見を糾弾し、妨害するところにあります。京都学派は、京都帝国大学の哲学者たちの中で、西田幾多郎を師と仰いだ人たちの俗称です。その特徴は、何事も前向きに取り組んで、常に前進していくところにあります。どちらもそれぞれに、日本文明の典型的な一面を現していると言えるでしょう。

そして彼らは、真剣に政治に参加して、思想戦に敗北していきます。彼らはあまりにも、通常の意味で政治的でなさすぎるのです。しかしその敗北は、愚かさを示しているのでしょうか。ここで考えるべきは、昭和の戦争において、アメリカの民主主義やソ連の共産主義ほどの説得力ある主張を、日本がついに提示できなかった、ということだと思います。日本が昭和の戦争を言い訳し続けなければならないのは、根本的には、中華民国に対して意味不明な戦争を行い、欧米帝国主義の打破というアメリカとの戦争の意味を実質化できなかったためではないでしょうか。日本が世界に対してどのような貢献をするのか。それはきちんと、思想的かつ政治的に自己主張すべきことですし、昭和戦前期のみならず現在もまた、必要とされていることだと思います。

このようなことを考えながら、この本を書きました。ここで「翻訳」した人びとは、思想が前のめりになりすぎて、政治的に評価できません。しかし、それならどのような思想を世界に提案すべきなのか。それが求められている現代こそ、多くの人に、昭和史の意味を問いなおしてほしいと願っています。

(うえむら かずひで 法学部教員)



カット 今村 唯

(外国語学部 4年次生)





李為, 白石善章, 田中道雄著

## 文化としての流通

同文館出版 2007



本書は、これまでの流通研究と違って文化という視点から流通を把握しようとする狙いがある。その理由は「流通を文化的表象として考察するに当たって、流通における文化の役割については、これまで多くの流通研究が冷遇してきた」からである。現在の流通研究を批判しているようなニューアンスも読み取れるかも知れないが、むしろ読者との知的緊張感を喚起しようとしている。

現代社会において文化活動や商業活動などの中には、はっきりとした境界は存在しないというのは、社会的に埋め込まれた慣習とか伝統すなわち文化によって規定されるからである。すなわち、「流通システムは、単なるモノの移転の現象ではなく、私たち人間のモノに対して意味づける行為のシステム」と深くかかわっている。したがって、流通論において単に経済的機能からその役割が説明されるのではなく、流通現象が文化的に基礎づけられるものとして、その性質を検討する必要がある。これが本書の問題提起と出発点である。

このような問題提起を中心に、三人の研究者は文化と商業という糸をもちいて時間軸と空間軸を通しながら本書が構成されている。もちろん、それぞれの研究者の専門領域や問題関心が異なっているが、文化と流通との関係を多角的に解釈していると同時に、「文化からの流通に対する認識は、単に物質的な繁栄としての流通に対する表面的な理解では一方方向になりかねない。つまり、流通の現象だけを問題にすることは、文化の歴史性と地域性を看過しやすいからである。文化的な意味の世界には別の解釈もあることから、ある社会に適応していた秩序原理とか基準とかが、異なる社会で必ず通用する保障は存在しない」という趣旨においては一貫している。

まず、李が担当した第1章、第5章、第6章において、本書の基本的問題提起とともに、「文化」の概念解釈およびその相互主観性によって、流通活動の暗黙の前提となる価値観、規範、倫理という側面である「文化」について議論している。さらに第5章「儒家文化とアジア的商業精神」と第6章「アジア

的商業精神を司る基盤」において、「社会の調和」を重視する儒学がプロテスタンティズムのような資本主義の精神とは異なる形で、商業発展の文化的基礎となったことを分析している。

つぎに、白石が担当した第2章、第3章、第4章ならびにまとめとしての第10章において、李の問題提起を受けて、商業がその発生段階から文化と切り離すことができない関係にあることを論じている。とくに李が儒学を基礎としたアジア的商業精神を析出したことに対して、白石がヨーロッパ圏での商業に対する社会認識の特徴やキリスト教文化における商業機能に対する態度を通して、資本主義の成立における社会的認識が大きく変化した点を分析している。

李と白石の議論に対して、田中が担当した第7章、第8章、第9章では、現代の商業文化という視点から、現代の商業文化が都市の階層的な発展を通じて、地域と都心という階層的な構造を持ちながら、異なった商業文化をもたらしたことを分析している。

このように流通と文化のかかわり方は実に多面的で重層的であることを浮き彫りにすることによって、異なった視点からの流通に対する考察が可能であることを示唆している。

(りうえー 経営学部教員)



カット 今村 唯

(外国語学部 4年次生)